

## M. 消化器 (消化管・膵)

222

<sup>75</sup>Se-セレンメチオニンの血中、膵液、胆汁中における動態について(第2報)

久大 放

○中山信一, 水上忠久, 梅崎典良

森田誠一郎, 大竹 久

九州がんセンター

河野 彬

県立柳川 放

矢野 潔

(目的):我々は,<sup>75</sup>Se-セレンメチオニンの血中、膵液、胆汁中における動態を、薄層クロマトグラフィー、及びオートラジオグラフを用いてその結合の位置を知ることを目的とした。

(方法):生後8週から10週の雄ラットに,<sup>75</sup>Se-セレンメチオニンの60 $\mu$ Ciから80 $\mu$ Ciを、大腿静脈内に注入し、静注20分、40分、60分、80分後の膵液、胆汁、膵胆汁混合液を採取し、又、血中におけるRIも薄層クロマトグラフィーを行ない、RI結合状態をオートラジオグラムで検索した。展開溶媒は、エタノールと水の混合液を用いた。

(結果):①ラットに投与した<sup>75</sup>Se-セレンメチオニンは、膵胆汁混合液を薄層クロマトグラフィー、オートラジオグラムにて検索したところ、対照として用いた<sup>75</sup>Se-セレンメチオニン(Rf値は0(2.5%),0.13(90.8%),0.56(6.7%))と異なつたプレート上の位置(Rf値は0,0.56,0.71,0.85)に放射能を認めた。②膵液に存在する放射能は、Rf値0と少量ではあるがRf値0.56の部位にあり、原点のものは、高分子化合物に結合したものと推測される。

胆汁に存在する放射能は、Rf値0.56,0.71,0.85、及び少量ではあるが0の部位にも認められた。

以上の結果から膵液中の放射能の化学形と胆汁中の放射能の化学形は、別種のものであると思われる。

③血中における<sup>75</sup>Se-セレンメチオニンは、すぐに分解し、Rf値0と0.56の2点に放射能の集積を認めた。

④静注後20分、40分、60分、80分後の膵胆汁混合液を薄層クロマトグラフィー、オートラジオグラムを行ない、各点における放射能集積部位をAloka auto well gamma system(JDC-751)にてRI測定を行なつた所、各測定点における放射能集積比には経時的变化がみられた。

223

異常膵シンチグラムのCT像について

熊大 放

○金子輝夫・福井康太郎・片山健志

[目的]膵シンチグラムで異常を呈した症例のCT像について検討し、二者それぞれの有用性を考察した。

[装置及び方法]RIシンチグラフィーは、仰臥位で通常のごとく行なつた。CT装置はCT-W2(日立製、スキャン時間7秒)及びCT $\gamma$  X-I(GE製、スキャン時間4.8秒)で、仰臥位及び希釈ガストログラフィン経口投与後の右側臥位でスキャンした。

[成績]膵石症で全欠損を示す症例では、膵石による高吸収領域の他に、膵の狭小化、不均等吸収像、辺縁不整像等がみられた。慢性膵炎でシンチグラム上、RI摂取の低下、辺縁の不整像を呈した症例では、CT像では膵の狭小化、辺縁の不整像等がみられ、比較的限局した欠損像では、CT像では形態上、異常を呈しない例もみられた。膵癌の症例では、シンチグラムではRIの摂取不良ないし欠損を示したが、CT像では膵影の拡大がみられた。しかし、低吸収領域を示す症例もあった。著明な疼痛を訴える症例中、諸種の検査で異常を認めなかったが、シンチグラムでのみ欠損像を示したものなど、CTの出現によりかえって、膵機能を表現する膵シンチグラムの有用性を再認識せしめる症例も存在した。

[結論]RIシンチグラフィーは、肝の摂取や消化管への排出など観察に障害になる点もあるが、膵機能を反映する意味で有用であり、CTは、膵の形態及び周囲器官との相互関係の判定や膵シンチグラフィーで欠損像を呈する症例などに有用であり、二者は併用して行なわれるべきものであると考えられた。